

もう20年以上も前のある大会のシンポジウムの中での出来事です。いよいよシンポジウムも最後の一言と段になって、「それでは、今日この大会に参加している施設職員の方々に最後に伝えたいことをお願いします」というコーディネーターの問いに答えて、あるシンポジストの方が、「私は、施設職員の方々が知的障がいの方に、ごめんなさいという謝罪の言葉を言っているのを聞いたことがあります。もっと施設職員の方々は、知的障がいの方々にきちんと謝るということをした方が良くと思います。」と述べたのです。そのシンポジストの方、車椅子使用の身体障がいのある方で、知的障がいの施設にワープロを教えるボランティア活動をしておいででした。話は続きます。

「施設職員の方、指示や命令をしている姿は、よく見ます。しかし、私が見ている間違っているなあと思ったことをした時にも、ごめんなさいと言わないんです。やっぱり知的障がいがあるから、謝る必要はないと考えているのではないかと私からは見えてしまいます。どんなに重い知的障がいがあっても、きちんとした一人前の人間としておつきあいをするという気持ちがあるのですしたら謝るといことは絶対に必要なことだと思います。」

さて、それから20数年経過し、支援現場には、どのくらいの「ごめんなさい」が溢れているのでしょうか？

「ごめんなさい」には、2つの使い方があります。一つには、このシンポジストの方が指摘しているように、間違っただけのことをした時のごめんなさいです。約束を守ることができなかった、相手の気持ちを傷つけるようなことをしてしまった時の「ごめんなさい」です。支援現場では、＜食事の後にコーヒーを出す＞という約束があるのに、コーヒーを出すのを忘れてしまったというような時の「ごめんなさい」に当たるものです。つい大声を支援職員が出してしまったなんていう時の「ごめんなさい」もこれに当たります。また、＜このお菓子を食べたのはあなたでしょ＞なんて勘違いをして疑って

しまった時の「ごめんなさい」もこれに当たります。

一方「ごめんなさい」は、自分の力が至らなくて申し訳ないという意味で使われる場合があります。

パニックを起こしてしまった方に、＜スケジュール作ってなくてわからなかったんだね、だからイライラしてしまったんだよね＞という時の「ごめんなさい」がこれに当たります。職員の支援力、支援量が不足していたからです。また、＜一日何回も服を脱ぐ＞なんていう行動に出会い、どんな支援をしたらいいのか分からないときにも「ごめんなさい」は必要です。＜あなたの気持ちが分からなくてごめんなさい、あなたへの支援方法がわからなくてごめんなさい＞なのですから。

このように考えてくれば、支援現場には、「ごめんなさい」が溢れて当然なのがわかって頂けたと思います。障がい重い方（知的障がい重いという意味ではなくて、支援重度という意味です）を支援する時ほど、私たちの支援力は至らない状況になるのですから、自分が至らないが故の「ごめんなさい」は増えるのです。

そしてさらに「ごめんなさい」には、真剣度、本気度が必要です。人というのは、自分の非はなかなか認め難いものです。それが強者と弱者の関係においては顕著に反映されます。中学校の先生は生徒に、夫は妻に、上司は部下に、親は子に、医者は患者に…etcなかなか本気には謝れないのです。みな強者と弱者の関係です。そして、私たちの支援現場も同様です。支援職員と知的障がい・自閉症の方々、どう見たって強者と弱者の関係です。

自分が間違っただけのことをしてしまった時に、そして自分が至らないと思った時に、心から「ごめんなさい」と知的障がい・自閉症の方に言えるか、それこそが職員の質を決めるのです。そしてこれが踏み外してはいけない人の道なのです。